

## 〈7〉 まとめ

以上の事例より、『スッタニパータ』の輪廻世界は次のようにまとめることが出来よう。

- ① 輪廻の観念は受容され、死後世界の存在も知られている。
- ② 何らかの形で実体的な死後世界として言及されているのは天と地獄のみである。人間と畜生界は無論知られていたであろうが、特に輪廻世界としての描写はない。アスラ、餓鬼世界はまったく知られていない。
- ③ 天と地獄は善悪業の果報を引くべき善悪の果報としての世界を代表する。
- ④ 天界の階層化は未発達で、梵天、トウシタ天およびインドラ神が知られている。自光天という天があり、おそらく、光かがやく天界のイメージを固有名詞としたものと考えられる。
- ⑤ 梵天にはヒンドゥー的なブラフマンとしての梵天と、仏教化され天界の一クラスである梵天の用法がある。
- ⑥ 涅槃を求めて出家する比丘には天界を望むべきでないことが教えられている。
- ⑦ したがって、天界は在俗信者の願うべきものであろうが、現世を倫理的に生きるためにこそ、生天を望めという脈絡で説かれることが多い。したがって、快樂の世界としての天の描写はおろか、その意味での形容もない。
- ⑧ 地獄に関して、十地獄の羅列があるが、その性格、成立と発展の経緯は明らかではない。その他の地獄の描写は現世の責め苦しみを恣意的に強調、描写した感があり、また地獄の刑罰としての確立はない。

## 第二節 『テーラガーター』、『テーリーガーター』の輪廻世界

### 〈1〉 輪廻世界

両テキストの性格からみても、ここに現れる輪廻世界は、世界そのものの描写を意図するというよりも、そこから脱すべき世界、という色彩が濃厚である。大変に興味深い例がある。

『テラガーター』(Theragāthā, Therag.)では、ある修行者が過去世における自らの輪廻を回顧するのであるが、その一節にいう。

私は、輪廻して、地獄に行き、餓鬼の世界にもくりかえし入った。畜生の苦しみの中にも、私は長い間いくたびも住した。

samsaram hi nirayam agacchisam, petalokam agamam punappunam,  
dukkhamamhi pi tiracchānayaniyā nekadhā hi vuditam ciram mayā. (258.)

また人間としての生存をも得て喜び、天界の身体にも、一度、再度入った。物質的なもののある世界(色界)にも、物質的なものがない世界(無色界)にも、思いがあるのでもない世界(非想非非想処)にも住した。

mānuso pi ca bhavo 'bhirādhito, saggakāyam agamam sakiṃ sakiṃ,  
rūpadhātusu arūpadhātusu n'evasaññidu asaññisu tṭhitam. (259.)

すなわち、輪廻の体験を語りつつ、自分の生まれた世界を羅列し、そして今や私は安らぎを得て、輪廻しない(260偈)ことをいう。ここに地獄・餓鬼・畜生・人間・天は、「世界」(loka)とか「胎」(yoni)、あるいは「身」(kāya)という言葉で示されるように、明らかに実体的な世界として理解されている。

さて、ここに色界、無色界、非想非非想処にも住んだことをいう。これらが輪廻の死後世界として、実体的に、考えられていたとは思われない。特に非想非非想処は元来が瞑想の深化の過程を示す一段階である。輪廻して、そこに住したというべきものではない。ところが、周知のごとく、後代になると(例えば『俱舍論』)、諸天は階層化され、そのすべてが三界に配当されるにいたる。非想非非想処は無色界のトップにおかれている。それがここでは無色界と「並んで」示されているから、後代のような階層化が出来ていない段階であることは明かである。色界、無色界というのも、欲界とともに、存在の領域を示す術語である。欲望のない世界、形の束縛さえもない世界、とは、実存的な修行、特に瞑想体験から生じたものと思われるし、少なくとも死後観として発展した観念ではない。しかし、

輪廻の観念の定着とともに、あらゆる存在の形式を経めぐったことを言うのに、欲界ばかりでなく、こうして色界、無色界まで住んだことがあると言う表現に連なってきたものであろう。そうであるならば、この文例は、後代の仏典の諸天の階層化、三界への配当という教理的な思想の萌芽を示すものとして重要視されてよいものであろう。

『テラガーター』、『テリーガーター』では天(sagga)にいくつかの種類があることを示しているが、まだ明らかな階層化はみられない。しかし、いわゆる六欲天に該当する諸天がグループをなしている事実はある。例えば、悪魔は三十三天、ヤマ天、トウシタ天、化楽天、他化自在天の神々に生まれるよう、心を念じよ(cittam paṇidhehi)とシースーパーチャーラー(Sīsūpacālā)尼に勧めている。尼はこれは輪廻の一環であり、それから出るべきことを説く(Therīg.197-199)。ここに列挙されている諸天は四天王天はないが、いわゆる六欲天である。

また、三十三天か〔は〕インドラ天〔を敬う〕(Therīg.181)といい、そのインドラは Therag.140 に Sujampati すなわち、”スジャー(Sujā)の夫”というエピソードであられる。

また目蓮は梵天界に赴き、梵天(Brahmā)に「梵天界もまた光輝が遷り消えていく」し、したがって、天人である「私〔さえ〕常(nicca)であり、永遠(sassata)であるとは言えぬ」と明言させている(Therag.1198-1200)。ヒンドゥー世界では至高のブラフマン天が、仏教パンテオン(pantheon)の中にとりこまれてくる一駒であり、ここでのブラフマン天は無常の存在だということから、少なくとも仏教の立場から言えば、ヒンドゥー的なブラフマンの至高性は剥奪されている。しかし、Therag.831,833 には「ブラフマンであるもの」(brahmabhūta)という表現でブッダを示している。ヒンドゥー文化の中の最高者を藉りて、ブッダの至高性を述べる仏典のよく用いるテクニックである<sup>(1)</sup>。

地獄(naraka)は言葉としては度々あらわれて悪行の者の赴くところとされるが、具体的な分類ないし描写はない。わずかに百本の鉄串による苦しみのある地獄という表現があって、未だ人間世界の刑罰を前提とする苦の世界というほどの意味で用いられていたことを想定させられるのみである。また、地獄におちる人

々は天上に生まれる人々を羨む、という大変に具体的な記述もある（Therag.62）。

アスラ、畜生、餓鬼についての特別の描写、記述は両テキストにおいて見当たらない。

註

(1) しかし、中村博士は「神聖なもの」と訳す。注釈の settha-bhuta に近い意味で解されたものであろうが、後代の注釈がブッダをブラフマンと同一視する事は避けるのは当然であるし、必ずしも信をおけない。むしろK.R.ノーマン教授にしたがって「梵天となった者」の方が古層の仏典として自然のように思う。

## 〈2〉 まとめ

以上をまとめると次のように要約されよう。

- ① 輪廻する場として、天、人間界のほか、色界、無色界、非想非非想処と言う存在の領域があげられている。
- ② いわゆる輪廻世界としては天、地獄がしばしば述べられ、人間、畜生界、餓鬼世界への言及はない。
- ③ 梵天はヒンドゥー的な不死のブラフマンが知れているが、それはブッダに否定されている。同時にその至高性が剥奪されて、人間と並列される仏教化された梵天が述べられる。
- ④ 後代の六欲天に相当する天界のグループが知れている。しかし、四天王天は記されるところがない。
- ⑤ 地獄は『スッタニパータ』と同じく、種々の肉体的責め苦は述べられるが、地獄の刑罰としての定着は見られない。

### 第三節 『サンユッタ・ニカーヤ』（Samyuttaniāya.SN.）の輪廻世界